

## 夏の日の三反帆 肌で感じる熊野川の風

「10時に風がかわります」  
熊野川へと漕ぎ出た舟の上で、船頭の荘司さんが言った。それまで海に向かって吹いていた風が、かすかに南から吹く風に変わった。

8月の日差しが強い日、三反帆の川舟で水上の旅に出た。旅のガイドは荘司準治さんと荘司健さん。荘司さん親子は幼少の頃より熊野川と共に生き、暮らしてきた。熊野川河口にある成川(三重県紀宝町)から川上を目指す。朝9時半に集合し、船に乗り込んだ。

大峰山系に源を発する十津川と、大台ヶ原山系より流れ出る北山川とが合流する大河、熊野川。かつて熊野川には物資を運ぶ川舟が行き交っていた。朝早く上流を出て、河口の湊を目指し、そして、南風を帆に受け、流れを遡って帰って行った。機械に頼ることのなかった時代、人は自然の摂理に逆らうことなく、それを生かして生活していたのだ。



## 熊野川生まれの川舟・三反帆

山々に挟まれる熊野川では、風を受け進む帆船が適している。三反帆は帆が三つに分かれた帆船で、その隙間からは前方がよく見渡せる。真横から受ける風も吹き抜けるため、転倒する心配がない。荷物を積み、一人で舟を操る船頭にとって安心できる相方である。

風がないときや早瀬では、舳先から横に固定された棹に引き綱をつなぎ、川岸を歩いたこともあったそうだ。その際竿一本で自由がきくよう、熊野川独特の形が「ねかじき」と呼ばれる部分だ。船底から船の側面までの間が斜めになっていて、横からの水の力が底を通って抜ける構造になっている。また早瀬でも安全に操作できるよう、船首も大きく反り返っている。舟を操る人の知恵が詰まった乗り物である。

この川舟の寿命はおよそ10年。どこの家でも次の舟を作るための木材を準備していたようだ。山と川、段々畑のある山里での熊野川流域の暮らしてである。

莊司健さん



莊司準治さん

## 熊野川の一部となって

順風が来た。その瞬間、川底を叩く波が心地よい音を立て始めた。帆がピンと張り、上流を目指す。長年の勤と、肌で感じる風の方向を読み取り、舳先を向ける。ゆるやかな南風を受け、ゆつくりと川の流れを遡っていく。船外機で走るときは音や揺れはない。兩岸に迫る深い緑の山々を抜け、川からの景色に目をやる。そこは意外にも静寂に包まれ、自然の音をしっかりと感じ取ることができた。静かに進む三反帆に乗っていると、熊野川に溶け込んだようだ。

## 川に繋がる森を育てる

昼食は陸へ上がり、シダが茂る豊かな森へと案内された。ほどよく光が射し、リュウビンの下草が元気に育っている。莊司さんは川舟船頭であるとともに林業家でもある。森を手入れすることは、あるべき川の姿を守ることに繋がついて



るといふ。莊司さんのガイドで、旅がより深いものとなる。

「山の畑が使われなくなったりして、昔に比べ森林面積は増えています。ただ森としての循環が崩れてしまったのです。薪や炭も必要でなくなりました。そうなった今では放置されたままの山より、よく手入れされた人工林の方が森や川を守る効果は高いのです。」

数十年前の熊野川では季節毎に泳ぐ魚に出会えた。梅雨の頃にはウナギ、夏の土用の頃には小さいハゼが川岸をのぼっていく姿を見てきた莊司さんは、当時の川を思い、理想の森を育てている。

## 熊野川の今、昔

午後一番の行き先は支流・高田川への分岐点。そこへ船をつけ、箱眼鏡で川の中を覗く。底まで透き通る水にアユ、ウグイが泳ぎ、石の間に川エビが隠れている。思わず水中に夢中になった。

兩岸の山々のように緑色の清流・熊野川。それでもダムや発電所、森林環境の悪化により、透明度がなくなつたと言う。幼少の頃から川舟を操り、何十年も熊野川を見つめ続けてきた

莊司さん親子の目には、その違いは明らかだ。「ダムの貯水はいつまでも濁った色をしている。美しい熊野川を残していくためには、地元の人で守らないといけない」と、強く語った。川上に向かって、釣り鐘石、骨島、

まな板石など次々と現われる奇岩を伝説も交えながら、案内してくれた。川風に吹かれながら、ゆつたりと時間の流れを楽しみ、かつての熊野川の暮らしに思いを馳せる。旅を通じてこの土地の生活文化に触れることに、満足感をおぼえた。

## 三反帆が伝える熊野川

熊野三山への川の参詣道として、そして木材や物資を運んだ水上交通として熊野川はその時代の人々と共にある。物資の輸送が川から陸に変わり、川舟には船外機が取り付けられ、三反帆は熊野川から姿を消していった。しかし、三反帆で往時の賑わいと歴史を語り、時代を乗り越えて今も残る熊野川の素晴らしさを伝える人がいる。

熊野を知り尽くしたガイドと共に地域文化を見つめ直す、三重・紀南エコツーリズム。熊野をこよなく愛する人々が、新しい風を吹き込んでいる。

## 三重・紀南エコツーリズムがめざすもの

私が、  
自然の一部に  
なる瞬間。

● 三重紀南には熊野の自然の中で育まれた独自の文化が残っています。「旅」を通じてその文化を楽しみ、学び、大切に守っていきます。

● 自然、信仰、祭、食、技…。現代の暮らしの中に豊かさを求める人が集い、感動や喜びを共有できる場、「自然の一部になる瞬間」を提供します。

● そして、発展した現代社会の中で、「自然の摂理を知り、自然とともに生きる知恵を求める」ことの価値を明らかにします。

## 「三重・紀南エコツーリズム推進会」の取り組み

「三重・紀南エコツーリズム推進会」は、ガイドとして活躍している熊野を知りつくした達人たちで組織されています。毎月一回の会合を通して、熊野の魅力ある地域資源を活用したモデルツアー！講座を検討・実施し、三重・紀南エコツーリズムの普及活動を行っています。

### 熊野の達人たちによる モデルツアー・講座

- ① 熊野を楽しむ達人の会 第16回例会  
『あなたに見せたい熊野』  
～春の瀬八丁を訪ねる～
- ② とうておきの熊野山村の暮らし体験講座その十九  
『茶摘み』～のんびりと、昔懐かしい山里で～
- ③ 熊野を楽しむ達人の会 第17回例会  
『立間戸谷の絶景』  
～新緑に包まれた三つの滝と屏風岩を巡る～
- ④ 熊野を楽しむ達人の会 第18回例会  
『熊野川 カヌー小旅行』
- ⑤ 熊野古道エコツーリズム  
『泊観音堂と三十三体の観音石像』  
～折りの道歩く～
- ⑥ 熊野を楽しむ達人の会 第19回例会  
『カヌーで行く、夕暮れの瀬峡(上瀬編)』  
～渓谷の絶景に身をゆだねる～
- ⑦ 三重・紀南エコツーリズム連続講座  
『熊野の魅力を探る』  
～芳遠先生と再創造する熊野～
- ⑧ 熊野を楽しむ達人の会 第20回例会  
『行くぞ！夏の前鬼川』  
～限りなく美しい自然に触れる～
- ⑨ 熊野を楽しむ達人の会 第21回例会  
『熊野川二三反帆の川舟に乗る』  
～風まかせの川旅～

(2007年4月～8月)



## 紀南ツアーデザインセンターの紹介



かまど 四連のかまど。毎日このかまどでお茶を炒り、お湯を沸かしてお茶を入れています。



玄関 玄関の引き戸と窓の格子が、栄えた商家らしさを感じさせます。亀甲積みの石塀も見事です。



座敷 襖で田の字に仕切られた座敷。お客様が休まれる他、会合や講演会などの場としても利用されています。



廊下 座敷と庭をつなぐ桜材の縁側は、ゆったりとした格別の空間を作ります。



土塀 座敷の奥には土塀に囲まれた庭があります。玄関前の石積み以外は土塀によって囲まれています。



階段 箱階段で二階へ上がります。当時の階段をそのままの状態です。

**建物のつくりと歴史**  
紀南ツアーデザインセンターの建物は、明治20年頃(今から約120年前)に建てられた純和風建築で、柵材を中心に建築された商家です。ほとんど改築されておらず、昔の姿をよくとどめています。



格子 外とゆるやかに区切られた空間を作り、建物に品位を与えています。



欄間 職人の息づかいが聞こえてくるような彫りの美しい欄間です。



庭 庭石と石燈籠の深い苔が、建物の歴史を語っています。春にはツツジが咲き誇ります。

### ◎熊野を楽しむ講座・モデルツアーを実施しています

熊野の自然・歴史・文化など地域を知り尽くしたガイドで構成される「三重・紀南エコツーリズム推進会」と連携し、熊野らしさを存分に楽しんでいただく講座やモデルツアーを企画しています。詳しくはホームページをご覧ください。電話やメールでお問い合わせ下さい。

### ◎熊野の案内所、休憩所として開放しています

センターの座敷や土間や庭先で自由にお休みいただけます。かまどで入れた熊野の番茶を飲みながら、懐かしさの残る建物でごゆっくりお過ごし下さい。また、日々の暮らしで使ってみたい地元作家の作品を展示販売しています。お土産として菓子や特産品も販売しています。

発行・問い合わせ先

紀南ツアーデザインセンター

〒519-4323 三重県熊野市木本町517番地の1

TEL.0597-85-2001 FAX.0597-89-3210

E-mail ▶ kinan-tdc@nifty.com

U R L ▶ <http://homepage3.nifty.com/kinan-tdc/>



本印刷物は大豆油インキで印刷しています



古紙配合率70%再生紙を使用しています



宝くじは  
豊かさ築く  
チカラ持ち。

宝くじは、広く社会に  
役立てられています。